

新設看護大学における1期生のディプロマ・ポリシーの認識(2) —2年次調査より—

井田 史子¹・村口 孝子¹・佐々木 晶子¹・
土居 裕美子¹・岩澤 磨紀²・細田 武伸¹

Fumiko IDA, Takako MURAGUCHI, Shoko SASAKI, Yumiko DOI, Maki IWASAWA, Takenobu HOSODA :

A Recognition of the Diploma Policy in the First Graduating Class of a Newly Established Nursing College (2)

— A Research in the Second Year —

本研究の目的は、A大学のディプロマ・ポリシーである「5つの看護力」の認識について、1期生が4年間のカリキュラムを通してそれらをどのように獲得していくかを明らかにすることである。2016年度の調査結果では、1年次の既修科目での学び演習に加え、各領域の「看護学概論」、2年次の「臨地実習」に基づく表現が盛り込まれている内容となった。特に「論理的な看護実践」は、実習を通して看護に必要な力と捉え、根拠に基づく看護計画・実践の難しさを感じていた。

キーワード：ディプロマ・ポリシー 1期生 認識 変化 臨地実習

はじめに

超高齢社会の到来や医療の高度化、社会や保健医療を取り巻く環境の変化に伴い、あらゆる看護ニーズに対応できる、より質の高い看護専門職の育成が望まれている。

平成4年「看護師等の人材確保の促進に関する法律」¹⁾施行以降、看護系大学数は、平成3年度11大学から平成27年度250大学へと急増した²⁾。一方、学士課程における看護学教育の課題として、コアとなる看護実践能力と卒業時到達目標の策定や、新たな看護学教育とその質の保証が求められている³⁾。

A大学は、「地域に貢献する人材育成」という建学の精神にもとづき、地域との密接な関係を背景として看護学教育を展開している。看護専門職に携わる者が卒業時に備えるべき力として、ディプロマ・

ポリシーである「5つの看護力」を定めており、学生に対して学生便覧等で明示している。この「5つの看護力」とは、①広い視野と人を思いやる豊かな人間性を育み、人生の問題や課題に誠実に向き合う力としての『向き合う力』、②高い倫理性と堅固な使命感をもって生き抜き、人に寄り添う力としての『寄り添う力』、③専門的な基礎知識と論理的思考にもとづいて看護実践する力としての『論理的に看護実践する力』、④チームワークを重んじ、創造的に多職種と連携・協働する力としての『連携・協働する力』、⑤病院から地域・在宅へと療養の場が移るなかで、地域で暮らす人びとの健康と生活を支え、地域とともに歩む力としての『地域とともに歩む力』の5つである。これらの力を、当該大学の教育を通して培うこととしているが、現時点ではディプロマ・ポリシーの到達度に関する具体的な評価指標については未整備である。そこで、4年間で学生が「5つの看護力」をどのように認識するのかを知ることにより、今後の教育評価内容を検討するための一助とすることとした。今回は第1報として報告した1年

1 鳥取看護大学看護学部看護学科

2 元鳥取看護大学看護学部看護学科

次の結果を踏まえ、2年終了時点に行ったアンケート結果を報告する。

1. 研究の目的

本研究の目的は、A大学のディプロマ・ポリシーである「5つの看護力」について、1期生である学生が4年修了時においてどのように認識し、受け止めているか、またその認識や受け止め方が4年間のカリキュラムを通してどのように変化していくかを、明らかにすることである。さらに、それらの結果をA大学における「教育目標の評価」に関する研究の一階梯と位置付けたい。

2. 用語の定義

本研究では、「ディプロマ・ポリシー」とは、大学がその教育理念を踏まえ、どのような力を身につければ学位を授与するのかを定める基本的な方針⁴⁾であり、学生の学修成果の目標ともなるものと定義した。

3. 研究方法

(1) 研究デザイン：縦断的記述分析研究

(2) 対象：A大学看護学部看護学科1期生79人

(3) データ収集期間：

第1回調査：平成27年10月、1年次前期終了時

第2回調査：平成29年3月、2年次後期終了時

今後30年度までに2回調査を実施する予定である。

(4) 質問紙作成およびデータ収集方法

ディプロマ・ポリシーの「5つの看護力」について、項目ごとに今どのように考えているのか自由記述による質問紙を作成した。質問紙を対象者に配布

し、回収した。今回の報告は第2回目の調査であるため、前回調査参加の有無の記載を追加した。

(5) 分析方法

回答は、外部委託にてテキストデータ化されたものを分析の対象とした。以下の手順にて、計量テキスト分析および内容分析を行い、量的、質的の二つの側面から分析した。

1) 計量テキスト分析

計量テキスト分析には、樋口⁵⁾の開発したフリーソフトウェアKH Coderを使用した。KH Coderは、テキストデータから自動的に語を抽出して、集計、解析を行うソフトである。データは品詞ごとに集計されるため、複数の品詞から構成される語および未定義の語については、予め、強制抽出する語（看護師、チーム医療、医療従事者、論理的、協働、まちの保健室、鳥取看護大学など）の指定を行った。自由記述から得られたテキストデータより、総文数、一人あたりの平均文長（文字数）、および助詞・助動詞を除いた総抽出語数と抽出語の出現回数を分析した。

2) 内容分析

①文章の趣旨に留意しつつ、表記を一部整えてコード化した。

②意見の主題をグループ化し、カテゴリーに分けた（大分類）。

③カテゴリーの細目として、キーワード（中分類）を抽出した。

④カテゴリー、サブカテゴリーを用いてカテゴリー間の関係性を見た。

⑤データの信頼性・妥当性を確保するため、共同研究者間で協議を行った。

4. 倫理的配慮

本研究は、鳥取看護大学・鳥取短期大学研究倫理審査委員会の承認を得て行った（承認番号2015-7）。

研究対象者には、文書および口頭で、研究の目的、方法、回答の任意性、不利益はないこと、プライバシーの保護、匿名性の保持（質問紙の記載事項は、外部委託にてデータ入力し、テキストデータ化されたものを研究者が分析するため、個人が特定されないこと）、結果の公表については個人が特定されないことなどを説明した。回答は無記名とし、質問紙記入後、鍵のかかる回収ボックスへの投函をもって本調査の同意を得たものとした。

5. 結果

(1) 研究対象者の概要

前回の調査から2年次終了までの必修科目の履修状況について、概要を述べる。基礎分野（教養）では「山陰論」・「日本語表現演習」・「手話」を受講していた。専門支持分野では「人体の構造と機能B・D」・「疾病論」・「薬理学」・「看護病態学」等16科目を受講していた。専門基礎分野では「基盤看護技術B」・「フィールド体験実習」等8科目、専門実践分野では「成人看護学概論」・「成人看護学援助論A」・「小児看護学概論」・「母性看護学概論」を受講していた。地域支援分野では「老年看護学概論」・「在宅看護学概論」・「公衆衛生看護学概論」であった。看護統合分野では「災害看護論」等4科目を受講し

ていた。

1年次後期には、「フィールド体験実習」で地区踏査を行い、2年次前期では初めての臨地実習として、「基盤看護学実習」を病院で2週間経験している。また、2年次の9月には鳥取県中部地震を大学で経験し、その後地域でのボランティア活動として、「まちの保健室」を避難所で行った学生が含まれている。

(2) 結果

回収率は79名中21名（回収率26.6%）。回収数は前回調査と同数であった。5つの質問項目のうち、未回答のものがあつたが、本調査では、無回答であることにも意味があると捉え、回答はすべてテキストデータとして扱った。また前回調査の参加は、16名が参加あり、2名が参加なし、3名が覚えていないと回答している。

(3) 計量テキスト分析について

5つのディプロマ・ポリシーについて、それぞれの総文数、総抽出語数、一人あたりの平均文長（文字数）、未回答者（人）を示す（表1）。前回調査時（1年次）の結果と比較するため1年次の結果を下段に記載した。総文数は、『地域とともに歩む力』『寄り添う力』『連携・協働する力』『向き合う力』『論理

表1. 計量テキスト分析による基本情報

	総文数	総抽出語数	平均文長	無回答者
向き合う力	873	197	45.9	2
(1年次)	1,313	305	62.5	0
寄り添う力	1,108	236	55.4	1
(1年次)	985	243	54.7	3
論理的に看護実践する力	746	149	43.9	4
(1年次)	731	185	47.7	6
連携・協働する力	1,007	236	50.4	1
(1年次)	1,167	279	68.6	4
地域とともに歩む力	1,171	269	58.6	1
(1年次)	1,056	263	58.7	3

表2. 5つのディプロマ・ポリシーから抽出された語句および出現回数（出現回数3回以上）※（ ）内は1年次

向き合う力		寄り添う力		論理的に看護実践する力		連携・協働する力		地域とともに歩む力	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
向き合う	23 (28)	寄り添う	24 (15)	思う	5 (3)	連携	10 (12)	地域	23 (28)
自分	15 (16)	思う	8 (7)	考える	4 (4)	協働	9 (8)	思う	8 (7)
力	11 (15)	患者	5 (9)	論理的	4 (4)	職種	8 (2)	人	8 (6)
患者	8 (6)	力	5 (10)	技術	4 (3)	考える	6 (4)	共に	6
相手	7 (4)	人	5 (5)	自分	4	人	6 (2)	実習	5 (6)
考える	6 (9)	実習	5 (2)	相手	3	患者	5 (9)	力	5 (6)
思う	6 (8)	相手	4 (6)	知識	3 (2)	力	5 (9)	行く	5
人	5 (8)	考える	3 (5)	患者	3 (4)	大切	5 (3)	歩む	5 (3)
実習	4 (2)	大切	3 (3)	考え	3 (2)	一人	5	大切	4 (3)
自身	3 (3)	不安	3 (3)			思う	4 (6)	大学	4 (2)
見る	3	学ぶ	3 (2)			看護師	4 (5)	鳥取	4
		自分	3 (2)			他	4 (2)	まちの保健室	3 (3)
		傾聴	3			必要	3 (6)	1年生	3
		安心	3 (1)			知る	3	学ぶ	3
		向き合う	3						

的に看護実践する力』の順に多かった。総抽出語数は、『地域とともに歩む力』（269語）、『連携・協働する力』（236語）、『寄り添う力』（236語）、『向き合う力』（197語）、『論理的に看護実践する力』（149語）の順に多かった。また、総文数、平均文長、回答者数ともに最も少なかった項目は、『論理的に看護実践する力』で1年次と同様であった。

次に、5つのディプロマ・ポリシーについて、抽出された単語および出現回数を示す（表2）。これらの抽出語のうち、ディプロマ・ポリシーに含まれ

る単語を除いた出現回数が4個以上の名詞は、『向き合う力』について「自分」「患者」「相手」「人」「実習」、『寄り添う力』について「患者」「人」「実習」「相手」、『論理的に看護実践する力』について「自分」「技術」、『連携・協働する力』について「職種」「人」「患者」「一人」「大切」「看護師」「他」、『地域とともに歩む力』について「人」「実習」「大切」「大学」「鳥取」であった。

(4) 内容分析について

テキストデータを、単語の意味内容に従ってコード化し、5つのディプロマ・ポリシーについて得られたカテゴリー数、サブカテゴリー数、コード数を示す(表3)。以下、【 】はカテゴリー、《 》はサブカテゴリー、〈 〉はコードを示す。

『向き合う力』として【向き合う対象】【向き合うために必要な力】【向き合うことでの成長】【向き合う力の理解】の4カテゴリー、『寄り添う力』として【寄り添うとは】【寄り添うために必要な力】【これから学ぶ力】の3カテゴリー、『論理的に看護実践する力』として【論理的な思考】【看護実践に必要な力】【看護実践の重要性】の3カテゴリー、『連携・協働する力』として【自分たちが育む大切な力】【チーム医療】【今後の展望】の3カテゴリー、『地域とともに歩む力』として【地域との結びつき】【地域医療】【大学での学び】の3カテゴリーが抽出された(表4)。以下は、それぞれのカテゴリーとサブカテゴリーの、特徴的な記述について述べる。

1) 『向き合う力』について

【向き合う対象】は、《相手と向き合う》、《自分と向き合う》、《地域と向き合う》、《現実と向き合う》の4サブカテゴリーから構成されていた。コードは、〈対象者と向き合う〉、〈患者と向き合う〉、〈自分に向き合う〉、〈自分自身に向き合う力が必要〉、〈地域

がいまどのような状態にあるのか知る〉、〈地域を学ぶ〉、〈現実と向き合う〉、〈課題に向き合う〉、〈将来に向き合う〉などであった。

【向き合うために必要な力】は、《学びの機会が多い》、《受け止める力》、《向き合うことの困難感》の3サブカテゴリーから構成されていた。コードは、〈グループワークを通して向き合う機会が多くなった〉、〈一緒に考えることができる〉、〈自分の意見をきっちり伝える〉、〈相手のことをしっかり受け止める〉、〈日常の先生方との関わりの中で感じる〉、〈後輩の姿を見て感じる〉などであった。

【向き合うことでの成長】は、《自分の成長につながる力》、《自分のものになっているという思い》の2サブカテゴリーから構成されていた。コードは、〈他人を見ることで自分の成長につながる〉、〈力を身につけていけたらと思う〉、〈力を伸ばしていきたい〉、〈1年の時より思いが強くなった〉、〈力が身についたと感じる〉などであった。

【向き合う力の理解】は、《それぞれの立場で物事を考える》《看護に必要な力》の2サブカテゴリーから構成されていた。コードは、〈人間関係を構築することが基礎〉、〈患者を受け止める力〉、〈対象者を理解する〉、〈主観を捨てる〉、〈真摯に考える〉などであった。

表3. 5つのディプロマ・ポリシーのカテゴリー数

	カテゴリー	サブカテゴリー	コード
向き合う力	4	11	77
	(1年次) 4	10	73
寄り添う力	3	10	50
	(1年次) 4	8	45
論理的に看護実践する力	3	8	40
	(1年次) 4	10	34
連携・協働する力	3	11	66
	(1年次) 3	11	59
地域とともに歩む力	3	12	57
	(1年次) 4	19	56

2) 『寄り添う力』について

【寄り添うとは】は、《相手の心に寄り添う》、《対象を理解する》、《看護に必要な力》、《地域に寄り添う》、《寄り添うの捉え方》の5サブカテゴリーから構成されていた。コードでは、〈相手を理解する〉、〈受け入れる〉、〈相手の状況を把握する〉、〈そばにいてだけでも寄り添いだと考える〉、〈寄り添い方にもいろいろある〉、〈相手が安心できる〉、〈大丈夫と安心してもらえる〉、〈相手のことを想う〉、〈鳥取県中部地震で大切さを感じた〉、〈地域に寄り添うことが、患者さんへの寄り添いにも通じている〉などであった。

【寄り添うために必要な力】は、《学習で学んだもの》、《コミュニケーション力》、《寄り添うことで得られたもの》の3サブカテゴリーから構成されていた。コードとしては、〈傾聴する力〉、〈コミュニケーションをとることの難しさ〉、〈患者さんに向き合うことを通じて学んだ〉、〈本当の「寄り添い」とは何なのかを知ることができた〉、〈自分自身も成長できる〉、〈寄り添うだけでもケアにつながる〉などであった。

【これから学ぶ力】は、《自らが人間性を育む》、《経験で身につくもの》の2サブカテゴリーから構成されていた。コードでは、〈寄り添うことができる存在になりたい〉、〈寄り添える看護師になりたい〉、〈寄り添う力は自己満足ではだめ〉などであった。

3) 『論理的に看護実践する力』について

【論理的な思考】は、《応用する力》、《知識が必要》、《土台となるもの》の3サブカテゴリーから構成されていた。コードでは、〈基礎となる大切なもの〉、〈看護技術において理論は重要〉、〈様々な方面から考えられる〉、〈技術（基礎となるもの）があったうえででの考え〉、〈主観的ではなく客観的に物事をみる〉、〈判断できる看護力〉、〈応用できるようになるための土台〉などであった。

【看護実践に必要な力】は、《今後身につけたい力》、《看護実践での気づき》、《看護に大切な力》の3サブカテゴリーから構成されていた。

【看護実践の重要性】は、《学びを活かす》、《論理

的に考える難しさ》の2サブカテゴリーから形成され、コードでは、〈安全に援助するために必要〉、〈安楽に援助をするために必要〉、〈しっかりと計画を立て、物事の筋道を立てて実施する〉、〈計画性を持つ〉、〈裏付けとなることを見つけるのが難しい〉、〈根拠を述べるのが難しい〉などであった。

4) 『連携・協働する力』について

【自分たちが育む大切な力】は、《チームワーク》、《コミュニケーション能力》、《身につけてきた力》、《多様な学びの場》の4サブカテゴリーから構成されていた。コードでは、〈チームワークはとても大切〉、〈お互いに思いやること〉、〈コミュニケーションが大切〉、〈意見の違いがあり相手の意見を受け止める力〉、〈みんなの意見を聞き、協働する力〉、〈グループワークなどで前よりは身についた〉、〈様々な方面から物事を考えられる〉、〈人の意見を聞く力がついた〉、〈実習などを通して学ぶ〉、〈より質の高いケアをできる〉などが挙げられた。

【チーム医療】は、《より良い看護に大切な力》、《他職種の理解》、《他職種との連携》の3サブカテゴリーから構成されていた。コードでは、〈確認作業などで協力して行わなければいけない〉、〈医療では「連携・協働」はなくてはならない〉、〈医療従事者を知ること大切〉、〈お互い尊重する〉、〈医師など多くの人と協力〉、〈チームナーシング〉、〈関係機関と協力〉、〈リハビリスタッフ・薬剤師・栄養士との協力〉、〈患者さんを自立させるため〉、〈一人の人を支えることが大切〉、〈対象となる人の暮らしを守る〉などが挙げられた。

【今後の展望】は、《協働することの意義》、《連携協働の必要性》、《患者を取り巻くチーム医療》、《看護職間の連携》の4サブカテゴリーから構成されていた。コードでは、〈病院から地域へ、もっと連携する力が必要〉、〈看護職は様々な医療従事者と患者の間に立つ〉などであった。

5) 『地域とともに歩む力』について

【地域との結びつき】は、《地域とともに歩む力が大切》、《地域活動への参加》、《地域貢献》、《鳥取の

表4. ディプロマ・ポリシーの5つの力について

総コード数 (290)

カテゴリー		サブカテゴリー	
向き合う力	向き合う対象	相手と向き合う (14)	
		自分と向き合う (11)	
		地域と向き合う (3)	
		現実と向き合う (2)	
	向き合うために必要な力	学びの機会が多い (13)	
		受け止める力 (7)	
		向き合うことの困難感 (4)	
	向き合うことでの成長	自分の成長につながる力 (7)	
		自分のものになっているという思い (3)	
	向き合う力の理解	それぞれの立場で物事を考える (10)	
		看護に必要な力 (3)	
	寄り添う力	寄り添うとは	相手の心に寄り添う (9)
対象を理解する (8)			
看護に必要な力 (3)			
地域に寄り添う (3)			
寄り添うの捉え方 (2)			
寄り添うために必要な力		学習で学んだもの (7)	
		コミュニケーション力 (5)	
		寄り添うことで得られたもの (4)	
これから学ぶ力		自らが人間性を育む (5)	
		経験で身につくもの (4)	
論理的に看護実践する力		論理的な思考	応用する力 (6)
			知識が必要 (4)
	土台となるもの (3)		
	看護実践に必要な力	今後身につけたい力 (7)	
		看護実践での気づき (6)	
		看護に大切な力 (7)	
	看護実践の重要性	学びを活かす (4)	
		論理的に考える難しさ (3)	
連携・協働する力	自分たちが育む大切な力	チームワーク (8)	
		多様な学びの場 (6)	
		身につけてきた力 (5)	
		コミュニケーション能力 (3)	
	チーム医療	他職種の理解 (8)	
		他職種との連携 (7)	
		より良い看護に大切な力 (4)	
	今後の展望	協働することの意義 (8)	
		連携協働の必要性 (8)	
		患者を取り巻くチーム医療 (4)	
		看護職間の連携 (4)	
	地域とともに歩む力	地域との結びつき	地域とともに歩む力が大切 (6)
地域活動への参加 (6)			
地域貢献 (6)			
鳥取の地域性 (3)			
地域の人とコミュニケーション (2)			
地域医療		地域での生活を考える (6)	
		退院後の生活を見据える (6)	
		地域医療の現状 (3)	
大学での学び		実習での学び (7)	
		大学と地域とのつながり (6)	
		「まちの保健室」での学び (3)	
		力不足 (2)	

地域性)、『地域の人とコミュニケーション』の5サブカテゴリから構成されていた。コードでは、〈地域活動に参加する〉、〈地元の行事に積極的に参加する〉などが挙げられた。

【地域医療】は、『地域での生活を考える』、『退院後の生活を見据える』、『地域医療の現状』の3サブカテゴリから構成された。コードでは〈その場所の気候などに合わせたケア〉、〈制度(社会資源)についての知識提供〉、〈地域で過ごしたいという患者さんの思い〉、〈地域でみんなが暮らせる医療〉、〈従事者だけでなく地域ぐるみで行う〉、〈地域全体が健康へとつながる〉、〈健康は、それぞれの地域の特色などによっても変化する〉、〈病棟数が少なくなっている〉、〈在宅での療養をしている人が増えている〉などであった。

【大学での学び】は、『実習での学び』、『大学と地域とのつながり』、『「まちの保健室」での学び』、『力不足』の4サブカテゴリから構成されていた。コードは、〈1年生の時の実習での経験が役立っている〉、〈実習や講義を通して、強く感じる〉、〈「まちの保健室」で身につけたもの〉、〈学習や「まちの保健室」を通してこの地に育てられている〉、〈まだまだ力不足〉、〈日常的に地域につながっている大学〉、〈地域の方々に望まれて建てられた大学〉などが挙げられた。

6. 考察

A大学は、これからの社会が求める看護師を育成する大学として、「専門的な基礎知識と技術を持ち、豊かな人間性で患者に寄り添う人材」「地域医療・在宅医療を支える人材」「地域で働くことに喜びと誇りを持つ人材」の3点を教育理念に掲げている。この理念をもとにディプロマ・ポリシーとして「5つの看護力」を定めている。さらにA大学は、地域包括支援分野を設け、将来の地域、在宅、連携・協働の在り方を見据えて活躍する看護師の育成を目指している。実習では4年間で段階的に看護実践力が身につくように科目配置がされている。

今回の調査では、ディプロマ・ポリシーである5つの力のうち、『向き合う力』に対する総文数が前回調査より減少した。1年次に行った調査では、「自分」、「相手」、「現実」、「死」などが挙げられていたが、2年次の調査では「死」という語がなくなり、「患者」、「実習」が増加していた。2年次では「基盤看護学実習」を履修したことにより、患者を通して自分と向き合うことについて考える記述となったと考えられる。「自分」を向き合いの対象としており、自分を高める、相手のことを思う意識が強くなっている。

【向き合う対象】の構成サブカテゴリに『地域と向き合う』があり、〈地域が今どのような状態にあるのか知る〉、〈地域を学ぶ〉の記述は、1年次後期の地区踏査と震災時の対応により導き出されたと推測される。A大学の建学の精神である「地域に貢献する人材育成」が培われていると考えられる。

サブカテゴリ『学びの機会が多い』が挙げられたことについて、学年が上がるにつれて、グループワークを通して学ぶ機会が多いと感じていることが推測された。グループワークでは、受け止めることの重要性和、困難な時に自分に向き合うことの重要性に気づいていると考える。また、「日常の先生方との関わり」や「後輩の姿を見る」ことを学びの機会と捉えていた。看護教育では「コンピテンシー」の学力を高めることが重要であると考えられており⁶⁾、グループワーク等によりこの力が授業の中で培われていると推測される。また、1期生であり2年次に初めて後輩ができ、後輩の姿を通して自分の成長を感じ、自分の力が身についたと考えている。

『寄り添う力』については、1年次の調査では『論理的に看護実践する力』の次に、総文数、平均文長、総抽出語数が少なかった。今回行った2年次の調査では、『地域とともに歩む力』の次にそれらが多い結果となった。抽出語は、「患者」、「実習」、「人」、「相手」に続いて、「傾聴」、「安心」、「向き合う」が追加された。1年次では一般的な表現が抽出されたが、2年次の調査では、傾聴することの重要性和、

そばにいて相手の気持ちを理解することが大切であると感じている。臨地実習で患者と接する中で「寄り添うこと」について考え、体験することで寄り添う力が身につくと考える。矢野⁷⁾は「実習は教員・指導者が、学生に気づきの機会を提供し、学習者は自己の気づきを確認することで看護の意味を深化させるように教授する活動」としている。このことから教員・指導者は体験したことを意味付け、学生が表現できるように支援する必要があると考える。寄り添う力の評価として、今後どのように表現するのか変化を追跡していきたい。

『論理的に看護実践する力』は、1年次と同様、他の力と比較して、総文数、総抽出語数、平均文長、コード数ともに最も少ない。2年次は【論理的な思考】【看護実践に必要な力】【看護実践の重要性】と捉え、これから学ぶものとして捉えていた。

今回の調査では、「看護とは何か、人が病を生きるということはどういうことかといった看護を学ぶ上での問いに向き合う。さらに、入院し病を体験している人に向き合い、心身の状態や生活の場である療養環境についての理解を深め、包括的に対象者を理解する基盤や姿勢を養う」A大学の基盤看護学実習の目的に即した回答が得られた。【論理的な思考】として基盤実習の内容や看護過程の展開を具体的な例を挙げて必要性を考えていた。しかし、「裏付けとなることを見つけるのが難しい」、「根拠を述べるのが難しい」などの回答から、論理的思考力の不足を認識していることがうかがわれる。各「看護学概論」、「疾病論」が終了しているが、専門実践分野の援助論講義と臨地実習により、その表現がさらに深まると期待される。

『連携・協働する力』については、語句では、1年次は「チーム医療」の表記は7個であったが、2年次は1個にとどまった。2年次の内容を見ると、チーム医療を具体的に表現し、看護師間の連携、リハビリスタッフ・薬剤師・栄養士など具体的な職種が記載されていた。患者を通してより良い看護実践に大切な力として捉え、他職種との連携には、他職

種を理解すること、コミュニケーション力が大切だと考えていた。抽象的な表現から具体的な表現へと力の理解が一步進んだのではないかと考える。

『地域とともに歩む力』については、1年次の調査では、建学の精神に基づき、カリキュラムの中の「生活健康論実習」、また「まちの保健室」に参加することで地域との関わりが理解できていた。今回の調査では、学生が1年次後期の「フィールド体験実習」、2年次の「基盤看護学実習」に加え、震災の経験を通して、地域で暮らすことについて具体的な表現が多く見られるようになった。しかし、行事に参加、地域貢献の必要性についての記載は見られるが、地域で暮らす人々の健康と生活を支える力についての記載がない。今後『地域とともに歩む力』をどのように理解していくのか、教員の関わりが重要であると考え。特に「在宅看護学」、「地域連携・協働実習」、「地域密着看護実習」、「公衆衛生看護」を学ぶことで、退院後の生活を見据える力、ヘルスプロモーションを進展する力を高めることができると考える。

今年度は、学内での講義や演習で修得した、基本的専門知識と技術を基盤として初めて臨地実習を行うことにより、実際の看護を体験し、論理的な思考の必要性を感じたのではないかと考える。失敗や気づき、喜びが看護への関心、実習への意欲に作用し、看護観の形成にも大きな影響を与えると考える。講義だけではなく実習で学んだことを理解しようとする学生の姿勢がうかがえる。このことにより、臨地実習において教員の果たす役割は大きいと考える。今後の実習により、ディプロマ・ポリシーの認識が深まることが期待される。

アンケート参加の有無の問に関しては、回答数が少ないために参加の有無で比較することはできない。今後この項目はアンケートから除外する予定である。

7. 研究の限界と課題

今回も回収率は低いですが、4年間を通して調査することに意義があるため、同じ方法で分析していく予定である。A大学の一部の学生の回答であるため一般的な概念には至らない。

8. 結語

(1)『向き合う力』に対する回答の総文数、平均文長が前回調査より減っていた。内容は、患者を通して自分と向き合うことについて考える記述がみられるようになった。

(2)『寄り添う力』に対する回答の総文数、平均文長が2番目に多い結果となった。内容は、傾聴すること、そばにいて心で寄り添うことを学んでいる。

(3)『論理的に看護実践する力』に対する回答は、実習を通し看護に必要な力と捉え、根拠に基づく計画・実施の難しさを感じていた。

(4)『連携・協働する力』に対する回答は、1人の患者を通し、互いの職種を理解し、コミュニケーション力の必要性を理解していた。

(5)『地域とともに歩む力』に対する回答は、「まちの保健室」、臨地実習、震災時のボランティアでの具体的な体験をもとにした言葉が表出されていたが、力についての記載は見られなかった。

A大学における看護学生のディプロマ・ポリシーの認識として、既修科目での学び、演習、臨地実習における体験に基づく表現が盛り込まれている内容

となった。授業で修得したことについては理解できつつあることが示唆された。今後の科目展開を通して、さらに「5つの看護力」の認識が深まることが期待される。

謝辞

本研究にご協力いただいたA大学看護学部看護学科1期生の皆様に感謝いたします。

引用・参考文献

- 1) 看護師等の人材確保の促進に関する法律、(改正平成二十六年六月二十五日法律第八十三号)。
- 2) 厚生労働省『看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就学状況調査』、(2015年度、定員設置別主体別都道府県別(大学)、政府統計の総合窓口)、<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=00001139988>, (2016. 3. 25)。
- 3) 文部科学省『大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会最終報告』、2011, pp. 7-20。
- 4) 文部科学省『「卒業認定・学位授与の方針」(ディプロマ・ポリシー)、「教育課程編成・実施の方針」(カリキュラム・ポリシー)及び「入学者受入れの方針」(アドミッション・ポリシー)の策定及び運用に関するガイドライン』、2016, pp. 2-7。
- 5) 樋口耕一『社会調査のための計量テキスト分析』、ナカニシヤ出版、2014, pp. 17-29。
- 6) 新井英靖『アクティブ・ラーニング時代の看護教育:積極性と主体性を育てる授業づくり』、ミネルヴァ書房、2017。
- 7) 矢野章永『看護学教育 臨地実習指導者実践ガイド』、医歯薬出版株式会社、2012, p. 5。